

2022年5月の例会&勉強会開催

5月15日(第三日曜日)
午後13:30～15:20
場所 ひぐらし会館2階 第二会議室
出席者 13名

稲木親子、岩本佳子、大川数馬、鍵本菜巳、加藤清志、川崎紀子、小西恒男、笹本千代、篠原憲、杉山美枝、土屋由美子、遠山敬二、米村邦臣(アイウエオ順・敬称略)

(議事録別途会員宛送付済み)

- 1) 例会:連絡事項
- 2) 加藤先生を囲む読書会
 - ・『祐親まつりによせて 伊東祐親、八重姫の最期』を読む
 - ・祐親は千鶴丸を殺さなかった
 - 『伊東祐親』、『伊東本曾我物語』を読む



<次回開催>

- ・6月19日(日) 13:30～15:30
- ・場所 **中央会館3階視聴覚室**
- ・勉強会テーマ
 - ・千鶴丸の行方

「郷土の葉」共有ファイル設定

※目次一覧:会員に配布

『郷土の葉』の1号から197号までの「目次一覧」が完成。24ページほどになりますが会員全員に一覧表コピーを差し上げます。(6月例会時配布予定)

※共有ファイルを作成しました。



『郷土の葉』のバックアップが揃い、その活用法として、パソコンメールによる閲覧利用ができるようになりました。

ご希望の方は、申し出いただければ共有ファイルをメールにて配信いたします。

自分のパソコンにて、いつでも自由自在にアクセスでき、資料の閲覧、検索が可能です。

*現在5名の方が登録されています。

※伊東のニュース

<2022年第47回伊東祐親まつり開催>

「47回続け良かった」祐親まつり 式典で
献花—伊豆新聞 2022/5/15 掲載記事より



伊東祐親像のパネルの前に献花する堀口理事長 = 伊東市東松原町の東海館

伊東祐親まつり初日の式典は、東松原町の伊東温泉観光・文化施設「東海館」に会場を変更して開いた。主催者や関係者、来賓らが献花や献歌・句を行い、祐親公をはじめとする郷土の先人へのしび、感謝した。

NPO法人伊東市文化財史蹟保存会の堀口武彦理事長は、放送中のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」で祐親公や八重姫が多く登場していることに触れ「市民が今までになく盛り上がっている。祐親まつりは伊東を象徴する文化の祭典と自信を持っている。47年続けて良かった、間違いではなかったと感じている」と述べた。

◆伊東祐親入道供養塚

伊東祐親が娘婿である三浦義澄邸で自害しましたが、その三浦義澄邸があった現在の葉山の銚摺(あぶずり)城址に「伊東祐親入道供養塚」があります。

～インターネットより写真掲載～



(C) Jokaku-horoki

「郷土の葉」は知識の宝庫

・「郷土の葉」はすでにお知らせした様に1992年(平成4年)7月に、その前の「上の坊通信」が9年ほど休刊されていたものをうけて、再刊第一号として発行されています。

・以来30年経過しましたが、最後の発行は第197号(2019/3/17)で、その後3年程休刊中です。

・6月13日は北里柴三郎博士の命日にあたります。(昭和六年六月十三日逝去、享年78歳、没後91年)

・「鈴木徳太郎町長(当時)の追悼祭の挨拶が「郷土の葉・第99号」に掲載されておりますので、コピー掲載します。

・先人たちの「郷土・郷土史」に対する熱き思いに敬意を表し、貴重な先達の精魂込めた「資料」を拳拳服膺したいものです。

郷土の葉

第九十九号
発行平成十五年十一月十日
伊東郷土研究会
編集 鈴木 茂

伊東郷土料理

その七
鈴木 茂

鱈のたたきとマゴ茶漬け
鱈の名の起りが「あじがよい」ことからだといったことを或る本で読んだことがあったが、鱈にも種類が多く、たたきには真鱈が一番である。最近では冷凍方法の進歩のお陰で都会にまで「鱈のたたき」が食卓に上っている。冷凍施設の行き渡っていなかった以前は、鮮度を身上的料理であるから、漁場ならではの「浜料理」の代表として地元の人々に親しまれていた。

子供頃を思い出すと、朝ともなると新井の女衆が、船から上がった、それこそ獲れ立てをリヤカーに満載し、「サカナ、サカナ」の売り声も高らかに「引売り」で家々に魚を売って歩く風景が伊東の変わらぬ日々であった。当時の伊東では大概の家の昼飯は「鱈のたたき」が食卓にあがったもので、家元のまな板で魚を刻む「トント」と賑やかな音でそれと知れた。
当時、魚の生が苦手だった私はこれにはホトホト閉口してしまっていた。今にして思うとあんな旨いものを、食べられなかった事に、食生活での大損をしていたと言った思いがしてならない。
その頃の鱈のたたきは、皮を剥き二枚におろし、骨ごと出刃包丁で身をたたいた荒っぽいもので、食べると口の中で骨がゴソゴソ当たったが、この方が味がよかったという。薬味にはショウガおろし、大根おろし、ネギ、シソの葉を細かに刻んだもの等が使われ、醤油をかけて、熱い御飯で食べると殊更に旨いものであった。
たたきと来れば、これに熱湯をかけ薬味と醤油で味付けして食べる「まご茶漬け」が欠かせない。生物に手が出なかった私もこれは喜んで食べたものであった。
伊東では別名「医者いらす」「医者ごろし」等とも呼んだ。文字通り、これを食べると滋養が付き、病気になるからだといいところからだと聞く。
最近では伊東湾で獲れた鱈に、お目にかかれなくなって、いきいきとした鱈を材料にした、たたきを食べる機会が珍

—目次—

- 1) 伊東郷土料理 その7 鱈のたたきとマゴ茶漬け 鈴木 茂
2) 「曾我物語を読むべえ会」でも 木村 博
3) 鈴木徳太郎町長式辞 編集子
・小学校分教場開校式
・祝辞(柴舟歌碑除幕式)
・故北里柴三郎博士追悼祭の挨拶
・女学校入学式の辞
4) 「石坂洋次郎氏と伊東」付記 佐藤 眞一
5) 関東大震災に就て当寺の状況 妙隆寺住職

<抜粋記事>

鈴木徳太郎町長式辞

・故北里柴三郎博士追悼祭の挨拶 鈴木徳太郎

本日医学博士男爵北里柴二郎閣下の追悼祭を行うに当りまして御遺族御門弟の方々が雨天の処を遠路わざわざ御参列下さいましたに就きましては、深く深く謝意を表します。又医師会の方々が多数御臨席下さいましたことは寔（まこと）に満足に堪へざる次第であります。

想ふに北里博士の薨去に対しましては、内外医学界の一大損失でありますので、朝野を挙げて追悼に堪へざるものがございまして存じます。その点に於て私も哀悼措く能はざる一人ではありますが、私が茲に医師会のお企てに共鳴して殊に町として追悼祭を営みましてのは、博士が世界医学界の権威であるからと申すばかりではなく、実に博士は我が伊東町に取りまして開発の大恩人であるからでございます。

博士と町との関係に就きましては当時親しく御関係なすつた方々の熟知せらるる所でありましようが先づ第一に博士が未開発の伊東を御選びなされて御別荘を御建てになりましたこと勿論温泉街たる伊東と致しましては、大いに発展すべき運命の下に置かれてありますので、早晚開発されべきは疑う余地はありませぬけれども、未だ交通不便な片田舎に過ぎなかつた際に於いて、御別荘を建てられたということは伊東の開発を非常に促進せしめたことを疑いませぬ。

又物質的にも莫大の御寄付をなすつて、堤塘の改築、通学橋の架設並びに架替え御成道の改築等を主として、消防器具其他の諸施設を助成し町の開発進展に御尽くし下さったことは枚挙に遑がありません。

殊に先年賀陽、山階両宮殿下が軍事演習のために伊東に御成り遊ばされた際の如き博士御夫妻には、わざわざ伊東まで御出張遊ばされて、町に代つて御歓待申上げて下さったのでありますが、是等は町民挙げて博士を徳とする所以でありまして、今日町として追悼祭を行いますのも、これは決して博士が世界的権威であるから御別荘があるからと言うような儀礼一遍の思い立ちから催しますのではありませぬので博士に対する感恩の念と哀悼の至情から出発しているのでございます。

で、私と致しましても、伊東に参りましてから日尚浅く遂に博士の訇咳（けいがい）に接することが出来ませんでした。これは伊東発展上終生の恨事であると痛切に感じられてなりませぬ。

ここに私は博士と伊東町との深甚なる関係を追想し哀悼の情に堪えませぬ、聊（いささか）、所感を陳べて式辞と致します。

昭和六年七月一四日

.....

この日伊東医師団（医師会）の下村亀太郎の発案で、開かれた北里芝三郎追悼祭には、令息善次郎 高弟北島 多一博士が来伊、参加し盛大な式であつたと、伝える。

<参考資料>

『伊東一人物誌』伊東市立伊藤図書館発行 P98

北里柴三郎先生追悼会のこと

—「伊東市醫師團會誌（昭和五年～昭和十二年・伊東医師会蔵）より—

『故北里柴三郎先生追悼會并（ならびに）講演會記

昭和六年七月一四日に開催された追悼会並びに北島多一博士の講演会の模様が詳しく描写されている。

～文章 省略～

前島 直次郎 記